

第7回 腹証奇覧・奇覧翼を読む

越婢湯他

診方 § 四 診

峯 尚志

今回学ぶ処方

(○は文礼の●は叔虎の解説)

●越婢湯、越婢加朮湯、越婢加朮附湯、越婢加半夏湯

●麻黄杏仁石膏甘草湯、麻黄杏仁薏苡仁甘草湯、文蛤湯白虎湯、竹葉石膏湯

○●桂姜棗草黄辛附湯、枳朮湯

麻黄の薬能

1

性味

辛、微苦、温

2

帰経

肺、膀胱

3

薬能

発汗解表

宣肺平喘

利水消腫

散風透疹

止汗作用（麻黄節）

麻黄の薬理

- 有効成分
- アルカロイド：Ephedrineおよびpseudo-ephedrineなど
- 薬理作用
- 中枢興奮、解熱、鎮咳、抗炎症作用、抗アレルギー作用
- pseudo-ephedrineに強い抗炎症作用あり
- 煎じ薬に強いSOD活性
- 麻黄のアルカロイドを除いた分画にも鎮痛作用あり

エフェドリンアルカロイド除去麻黄エキス EFEのがん転移抑制作用

(ephedrine alkaloids-free Ephedra Herb extract) (国内特許)

鎮痛作用と抗炎症作用、がん転移抑制作用

麻黄の新たな薬理作用として、がん細胞の運動能抑制作用を介したがん転移抑制効果や、がん細胞の増殖抑制効果を介した抗腫瘍効果を、マウスを用いたin vivoの解析から明らかにし（非特許文献4）、その分子機構として、肝細胞増殖因子（HGF）の受容体であるMet阻害によるHGF-Met-Aktシグナルの抑制によるものであることを報告した

「日向須美子、薬局、69、278－285（2018）」（北里大学薬学部）

石膏

- 含水硫酸カルシウム鉍石 組成はほぼ $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$
- 性味：辛、甘、大寒
- 帰経：肺、胃
- 薬能
- 清気分実熱（清熱瀉火、徐煩止渴）
- 清肺熱
- 清胃火
- 清肌斂瘡

越婢湯、越婢加朮湯、越婢加半夏湯、麻杏甘石湯



越婢湯

右図のごとく水気上部に集まり、
喘咳気急、一身腫れ、
脈浮、自汗出、或いは汗なく、
その心胸の間を覆手圧按するに、
皮膚を隔てて熱状を知ること、

例えば、
熱灰を袋に盛りその上より按ずるが如く
なるを伏熱の候として、
越婢湯の正証とす。



風水、悪風、一身悉く腫れ、脈浮、渴せず、
続きて自汗出て大熱無きは、越婢湯これを主る。

大熱というのは表証の熱であって、表の熱はなくて、筋肉の底にフツフツとこもっている熱が越婢湯の目標である。

越婢湯の熱は、体表の熱ではなくて、
内に底気味悪しき熱を伏したりの謂いを大熱なきというなり



越婢加朮湯

もし、前証にして小便不利、あるいは足弱きもの、越婢加朮湯の証なり。
足弱きものとは、脚膝ガクガク、ブラブラとして力なく、
ややもすれば、つまづき倒れんとするものをいう。

症例 43歳 男性

主訴) 左顔面神経麻痺

現病歴)、三日前より微熱あり、二日前より顔の右側が引きつり、左側の筋肉が弛緩して力が入らず、食べ物がこぼれてしまう。また食べたものの味がわからない。

現症) 体温37.5℃、空腹時血糖210mg/dl、HbA1c8.8、CRP3+、左額のしわ消失、眼瞼下垂、口角の下垂あり左顔面神経麻痺の所見、糖尿病あるため入院加療とした

脈弦数、口渇あり、舌はやや紅色、白膩苔を中等度認める。採血にて帯状疱疹抗体価上昇のため、ラムゼイハント症候群と診断。

土曜日であること、糖尿病のコントロールも必要と考え入院加療とした。

経過

以上の所見より越婢加朮湯証として煎剤を処方

麻黄6、蒼朮6、甘草2、生姜1.5、大棗3、石膏20 gとする。越婢加朮湯エキスより、さらに劇的な効果を期待して煎薬とした。

ところが、月曜日出勤して患者さんの様子を観察すると、まったく改善なく変わりがない。

以前にも越婢加朮湯が带状疱疹による顔面神経麻痺に著効した経験があったために、不思議に思い、薬局に処方の確認をした。

すると処方の読み違いにより、20 g出したはずの石膏が2 gしか処方されていないことが判明。

さっそく20 gに変更して処方。

そうすると翌火曜日には麻痺が劇的に改善して、眼瞼下垂、口角下垂が改善し、食べたものもこぼれなくなった。さらに3日後には味覚障害も治り、1週間後完治した。

麻黄一石膏の炎症性浮腫の改善効果に驚くとともに石膏の分量の大切さを思い知った使用例であった。



越婢加半夏湯

脈浮

喘鳴

上気：顔がむくみ、肩で息をして、咳き込むもの

半夏を入れる理由：痰飲が上にあがり、咳のぼせがおきるため。

麻黄杏仁石膏甘草湯

喘鳴、咳

腹証：腹張りて皮上に凜としたる力あり

石膏の証とは大熱なく汗出

（熱臭を燻蒸する汗）

口渇あり、或いはなし

（煩熱脱水で口渇、胸部に水滯あるため口渇なし）

気管支を拡張し気管支粘膜の炎症性浮腫を取り除く

麻杏苳甘湯

麻黄4、杏仁3、薏苳仁10、甘草2

麻黄杏仁薏苳仁甘草湯 (金匱要略：風湿喝病編)

- 病者一身尽く痛み、発熱、日晡所激しき者は、風湿と名づく。この病は、汗出でて風にあたるに傷れ、或いは久しく冷をとるに傷れて、致すところなり麻黄杏仁薏苳仁甘草湯之を主る。
- 風湿とは発汗後や身体を長く冷やした後におこり、夕方の身体痛と発熱を主症状とする病態で、之には麻杏苳甘湯をあたえる。
- 風湿、身痛み、発熱するもの

応用

- 1 関節リウマチ
- 2 変形性関節症に伴う、関節痛や筋肉痛
- 3 尋常性疣贅
- 4 手掌角化症
- 5 水虫

文蛤湯

- 文蛤、麻黄、杏仁、石膏、甘草、大棗
- 吐して後、渴して水を得んと欲して飲を貪る者、
- 兼ねて微風脈緊にして頭痛するもの主る

文蛤

性味

甘、寒、鹹

帰経

肺、胃、肝

薬能

陰液を滋養し、排尿させる
陰液不足による排尿困難を治す
痰核を取り除く、腫塊を消散させる

応用

糖尿病、むくみ、痰湿、咳、痔



●白虎湯

図の如く、腹皮りんと張り、
之れを按すに、力ありて底に堅満せず
覆手圧按するに、胸腹、肌膚の熱状を得ること
熱灰をふくろの外よりなぞるがごとく
ようやくにして掌心に应じて
焼くがごときを覚えるもの

所謂、大熱なきものにして白虎湯の腹証なり
また熱厥とて手足逆冷すること、
四逆湯の見証に似たるものあり



竹葉石膏湯

右図のごとく

胸満、氣逆して喘咳を發し

虚里動跳り、少氣し、吐せんと欲し

腹中軟弱、

或いはもの無きが如く背につき

動悸たかぶり、脈虚数、

午後暮れる前に熱潮し、

五心煩熱、渴して水を飲むことを欲し

虚羸肉脱、肌膚枯燥するもの

竹葉石膏湯の証なり



竹葉石膏湯

竹葉9、石膏30、半夏6、麦門冬12、人參6、炙甘草3、粳米9

1

効能

清熱生津、益氣和胃

2

主治

邪熱未清、氣津兩傷

3

病機

熱病の後期で、高熱、多汗により氣津が消耗し、余熱が残存している状態

4

症候

微熱、胸苦しさ、不眠、嘔気、咽乾、乾咳、口渇、息切れ、疲労感、舌質紅、舌苔少、脈細数無力

5

条文

傷寒解して後、虚羸少氣し、氣逆して吐せんと欲するは竹葉石膏湯之を主る。（傷寒論）

参考：竹茹温胆湯

柴胡3、黄連1、竹茹3、陳皮2、半夏5、枳実2、茯苓3、
桔梗2、麦門冬3、人參1、甘草1、生姜1、香附子2

1 効能

利気化痰、清熱和胃

2 主治

胆胃不和、痰熱内憂

3 症候

咳嗽、いらいら、口苦、
不眠、動悸、胸苦しさ、
嘔気、微熱



桂姜棗草黃辛附湯

桂枝去芍藥湯
合
麻黃附子細辛湯

○桂姜棗草黄辛附湯

図のごとく心下に毒ありて、
その形、円（まどか）なり
所謂、盤のごとく、
辺の旋杯の如きものこれなり
之れを按ずるに、堅くして
大承気湯の堅塊に似たり
しかれども、
大承気湯の堅塊は
その形長きを以てこれと別つ



●桂姜棗草黄辛附湯

右図のごとく心下に塊ありて、
その形、円なること
覆杯（杯をふせたる）の如く、
之れを按ずるに堅きこと骨を循ずるが如し
然れども、この証にして病輕きものは、
堅円をなさず
ただ、心下痞硬するものに似たり

要するに、心下結集して、腹、時に満し、
脇下水鳴昇降し
微惡寒、身冷え、骨折疼痛の証ありて
脈沈、瀦渋鬱結の状あり。



寸口の脈、遅にして濇、
遅なるは則ち寒となし、
濇なれば血の不足となす

桂姜棗草黃辛附湯証に伏在する胸満について

福田佳弘（福田整形外科医院、鳥取）

- 桂枝去芍薬湯
- 太陽病 下之後 脈促 胸満者主之（結胸の軽症）
- 若微寒者 桂枝去芍薬加附子湯主之
- 瀉下により胃腸は衰耗し、胃陰が上逆し、陰盛陽衰し胸満する。
さらに寒により心陽が衰え、附子、細辛、麻黄の加味が必要となる。
- 胸骨末端の両側肋間部とTh12-L1の両傍脊椎筋の按压痛を確証とする。
これは桂枝去芍薬湯における「胸満」の他覚症候である。
胸満は本例における必須の症候である。

稲葉文礼 腹証図彙

門人関完俊代筆：1795年）、腹侯弁略（1786年）、腹証奇覧は1800年

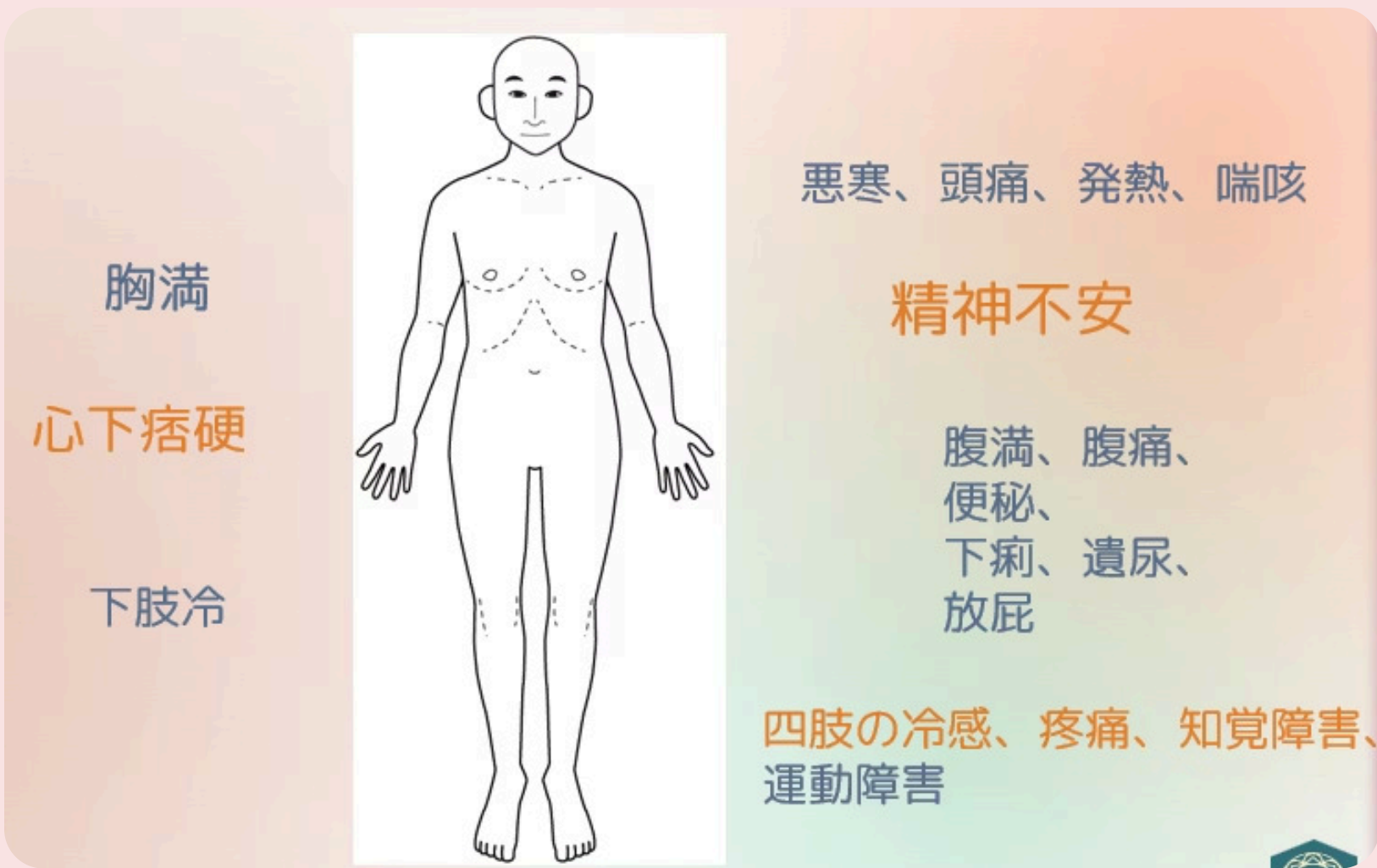


花輪壽彦

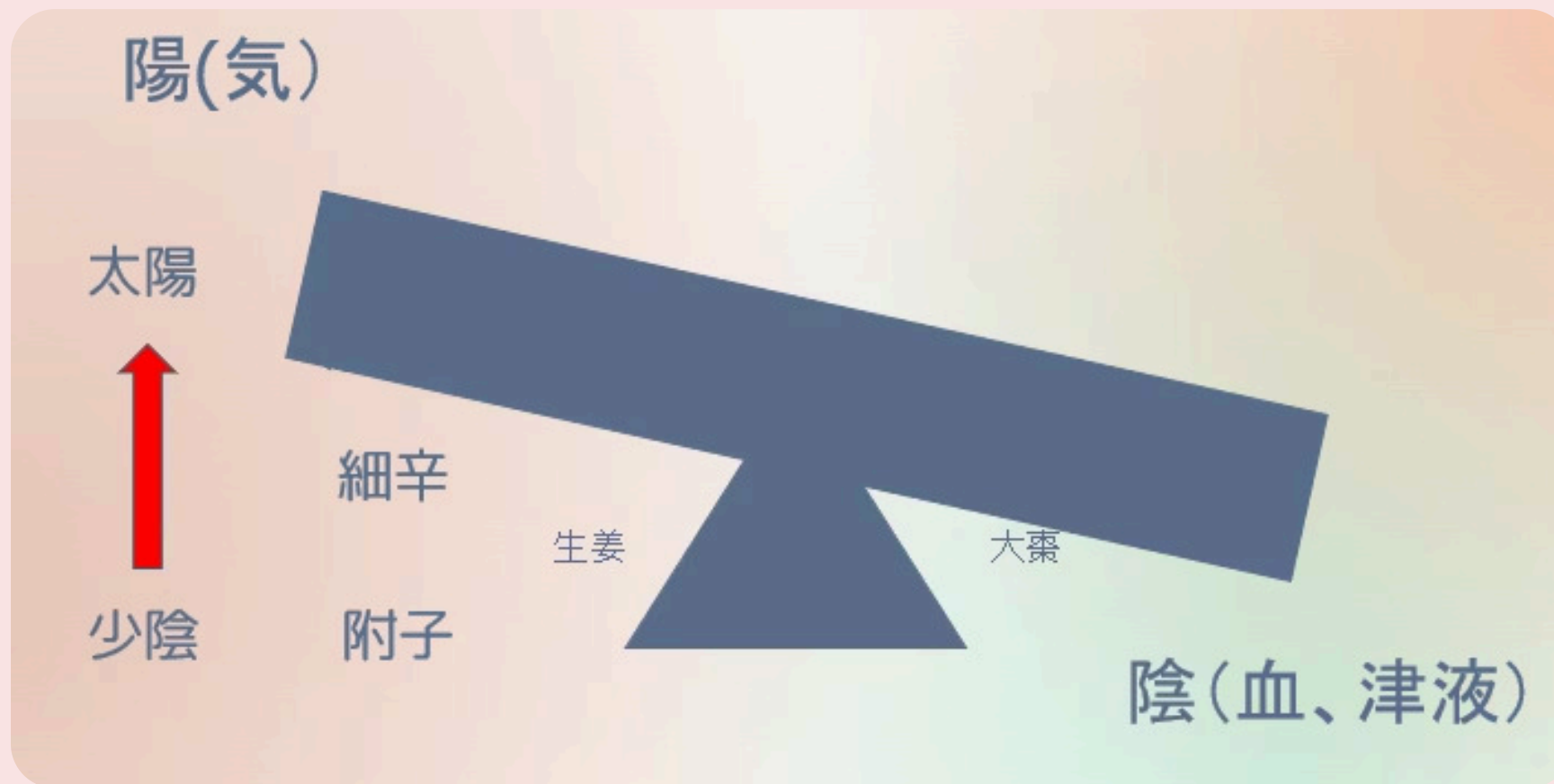
サーモグラフィー
腹壁の体温の不均一
心下部が時に冷たく、時に熱く
旋盤というより心下痞程度の張りのことが多い

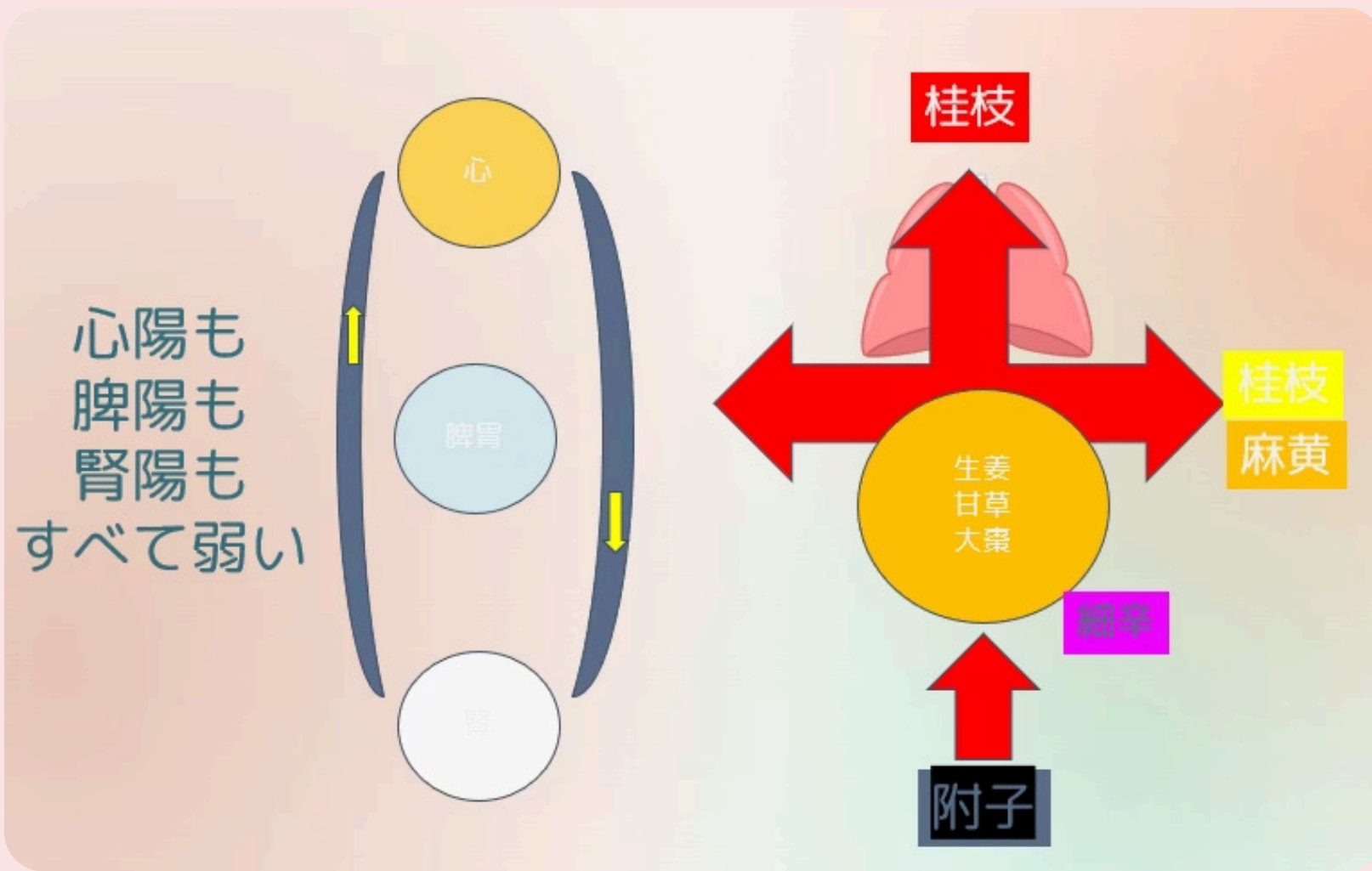
稲本善人

腹部エコー
腹直筋の旋杯状の肥厚
胃大弯前壁の緊張による縁取り



桂姜棗草黄辛附湯の処方構成





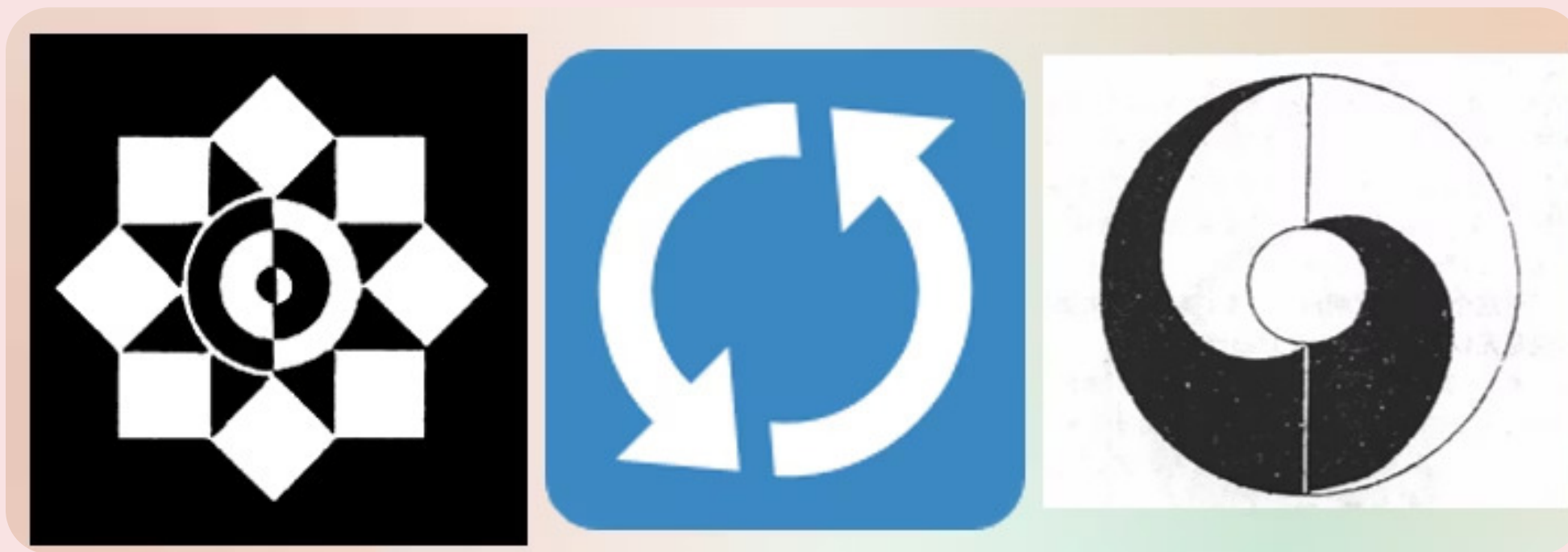
脾腎陽虚により
心下に滞った気水を
温陽利水とともに発散し
引火帰元し
大気を一転さす

大気とは
胃から作られる穀気
胸中の気（宗気）
或いは両者が合わさったもの

山田業広「経方弁」

- 按ずるにこの方は、すなわち小青竜湯の類方なり
- ただ彼はすなわち外邪、水飲を兼ね、此れはすなわち水飲中、気を結ぶ。
- すなわち胸中の陽を運らせて、水飲を疏（通）すの剤
- 小青竜湯の「心下に水気有り」に付着すればすなわちその義は了燃たり

気分証：陰陽分離



停滞を払い、大気一転す



斂陰の芍薬は要らない

桂姜棗草黃辛附湯は気分のガラポンだ

軸（脾）を中心に一気に回す
陰陽を調和させるのではなく一つのベクトルで一気に回す

旋盤



旋盤（痞鞭）はみえることありみえぬこともあり

エキス剤における

桂枝湯

合

麻黄附子細辛湯

実臨床では虚証の患者さんの 感冒に用いられることが多い

- 麻黄附子細辛湯は腎陽虚の患者さんの感冒に著効する切れ味のよい処方
- 胃腸虚弱な患者さんの場合、これに桂枝湯を加えて脾胃を守りながら、切れ味を期待しながらもやさしく寒邪を散ずる
- この場合は芍薬があっても邪魔にはならない。

枳朮湯

○また図のごとく
心下堅大なるものに枳朮湯の証あり
これその外証によって之れを別つべし
この方は上衝喘久、或いは自汗、
或いは悪寒、或いは身傷むもの是なり
枳朮湯の証は小便不利なるもの是なり

●もしこの証にして、小便不利、
もしくは水腫するもの枳朮湯の証なり。



枳朮湯の症例（漢方の臨床より）

枳實、白朮の二味

心下堅く、大きな盤のごとく、辺、旋盤の如きは、水飲のなすところ

枳朮湯これを主る。（金匱要略）

73歳男性、喫煙者、酒飲み、糖尿病、狭心症あり。

食道癌末期。食道から胃にかけて10cmにわたる腫瘍、転移あり手術不能

心窩部が軽く膨満して、中脘が冷え、食事が全く通らなくなった

枳朮湯（枳實6、白朮2）で口からである泡が消失して、あんパン、ヨーグルト、アイスクリームが食べられるようになった。

おまけ：大気一転湯（新作）

柴胡、升麻、**赤芍**、甘草、香附子、葛根

当帰、地黄、

党参、淫羊藿

沢瀉、茯苓

不安、抑うつに効果（和漢薬学会誌6、8-12、1989、魏振装、渡辺裕司）

まとめ

- 越婢加朮湯は麻黄一石膏の組み合わせによって炎症性浮腫を強力に取り除く処方です。
- 体表に熱感をもった関節浮腫などは、良い目標になると思います。
- 麻杏甘石湯は気管支の炎症性浮腫を取り除きます。
- 桂姜棗草黄辛附湯は大気一転の処方といわれる。温陽利水の附子と、桂枝、麻黄、細辛という『散』の作用のある生薬が多用されており、停滞した気の流れを『散』の力で発散しながら最後に桂枝の引火帰原して腎に戻すというのが『大気一転』の意味ではないかと考えています。従って私は、商店街のくじ引き会場でみかける『ガラポン』のような処方であると考えています。
- なお、桂枝湯合麻黄附子細辛湯で代用するが、芍薬があることで作用がお腹の弱い人、脈の弱い、虚証の人の風邪にきわめて有効な処方となります。